

# 風土



雀の子

神蔵器

天渺々大反射炉や雀の子

桂郎の来て迎へ火に炎足す

ふるさとは稲の分蘖十重二十重

鎌倉に源氏の山野平家の花野

かたつむりに働く時間ありにけり

一つ折つて白洲次郎の恋椿

迎へ火焚くたつた一人に多勢来て

神田川祭の笛のさかのぼる

かなかなも蛸も見ずに草田男忌

盆の夢歳を忘れてゐたりけり

右往左往初蝶の来てとんぼ来て

哲学の七賢人や葱坊主



# 竹間集

同人作品



桑は実に

田中佐知子

蓮の花咲ききつて風堪ふなり  
杉桧伐られて滝の迫るかな  
滝の風やまもの樹に届き来て  
兄の墓草引けば露こぼるるよ  
桑は実に綾子生家の閉ざされて  
雨止んで綾子生家の蝸牛  
遠雷や出土の甕に煤のあと

蓮一花

工藤ミネ子

畦刈りの鶴と見まごふ形をして  
夏草に柵田紛れてしまひけり  
病葉の地につくまでをゆるやかに  
瀬を抜けて子らと遊べり夏の川  
逃げ水やトンネルにわれ吸ひ込ま  
山蟬のつぶやきも聞く村外れ  
山の気を山雨と落し蓮一花

昼寝

柴田久子

水中花時々修羅のこゑあげぬ  
方丈に昼寝の踵見えてをり  
サイダーや母の三癖ゆづりうけ  
サイダーの木桶に浮きて山の駅  
水面の硬さをすべる水すまし  
一斉にビル立ち上がる夕立あと  
日帰りの生家に青柚摘みてあり

祭稚児

中村 洋子

位受く正五位少将祭稚児  
一刀に注連切る稚児の祇園祭  
巫女舞の曲線となる夏祭り  
丹沢の水足してゆく金魚売り  
店頭にブリキの玩具雲の峰  
上り鮎光となりて直進す  
モンタンを聴いて私の巴里祭

銚子

橋添やよひ

銚縄や男結びに締め上ぐる  
組み上がる銚をみてゐるソーダ水  
銚組みて縄の匂ひの大路かな  
銚頭斜に閃光日雷  
組み上がる銚の唐破風菊の紋  
銚囃子遠く聞こゆる茶漬けかな  
白南風やフランスパンの焼き上がる

熱帯夜

浅田 光代

あめんぼうとぎに流るることをせり  
「青葉木菟来ました」村の掲示板  
桜の実読書の唇のとがりくる  
白雲の触れゆく菊の銚頭  
二階より稚児の高声銚会所  
配線のどれがどれやら熱帯夜  
黒髪のパスに混み合ふ広島忌

波の腹

柿沼 盟子

長針の動く音して梅雨の明  
白南風や轍のままに土乾き  
前後から蟬のこゑ雨止んでをり  
大粒の大暑の雨やまたも過ぐ  
沖めざし泳ぐや波の腹くぐり  
甲子園のラジオ中継海の家  
滝の生む風に吹かれてをりにけり

竹間集作家特別作品

## 大花野

宮川みね子

兄弟は大勢がよし夏座敷  
八月の腕に食ひ込む旅鞆  
蟬の穴あまたふるさと甥の逝く  
額づけばちちははの声盆が来る  
メロンの匙ふきて法事の果てにけり  
薄日してゐる山々や秋はじめ  
リハビリへ坂ひぐらしのなかにな  
一滴の目薬こぼる終戦日

立て付けの障子しなやか今朝の秋  
秋思かな書棚に夫の謡本  
秋気満つ生きがひひとつあればたる  
ワイングラス二つそろへて九月来る  
年重ね見えてきしもの曼珠沙華  
過ぎた日々これからの日々秋落暉  
青空の芯のほぐる花野かな  
肌寒や口みつからぬセロテープ  
気遣ひの言葉かけられ大花野  
刃物研ぎ現はるを待つ雁渡し  
追憶の淡くなりゆく新松子  
罌雲常のひびきの神田川

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

中吊りに七月の旅満載す  
森田 節子

洋館の円柱八本石榴咲く  
訓練の警察犬や日の盛り  
海の日の総帆展帆晴れわたり  
緑陰に楽譜を読めるをとこかな

佐野つたえ

山百合の一枝に十の花付けり  
家建つる職人屋根に大暑かな  
あの夏の玉音放送蘇へる  
子の水着少し色あせ晩夏かな  
星祭「宇宙で踊る」子の願ひ

鈴木 庸子

巴里祭や土蔵に手回し蓄音機  
七月や牧にあづかる牛の群れ  
命綱付けて枝打つ雲の峰

駅の名に昔こころは百合の丘  
膝に置く夏帽溪流下りかな

梅雨晴や蕎麦屋の流すカレーの香  
中根 美保

覗き見る噴井より風微かなり  
サングラスかけて隙なきスーツかな  
郭公や竈を塞ぐ古瓦  
白はちす遠き一花のひらくなり

川田 好子

韋駄天に子等駆けぬける大夕立  
仲見世の裏ぬけ四万六千日  
白南風の空を展ぐる庭師かな  
半夏生農事日誌の月日かな  
月見草始発電車に咲きのこる

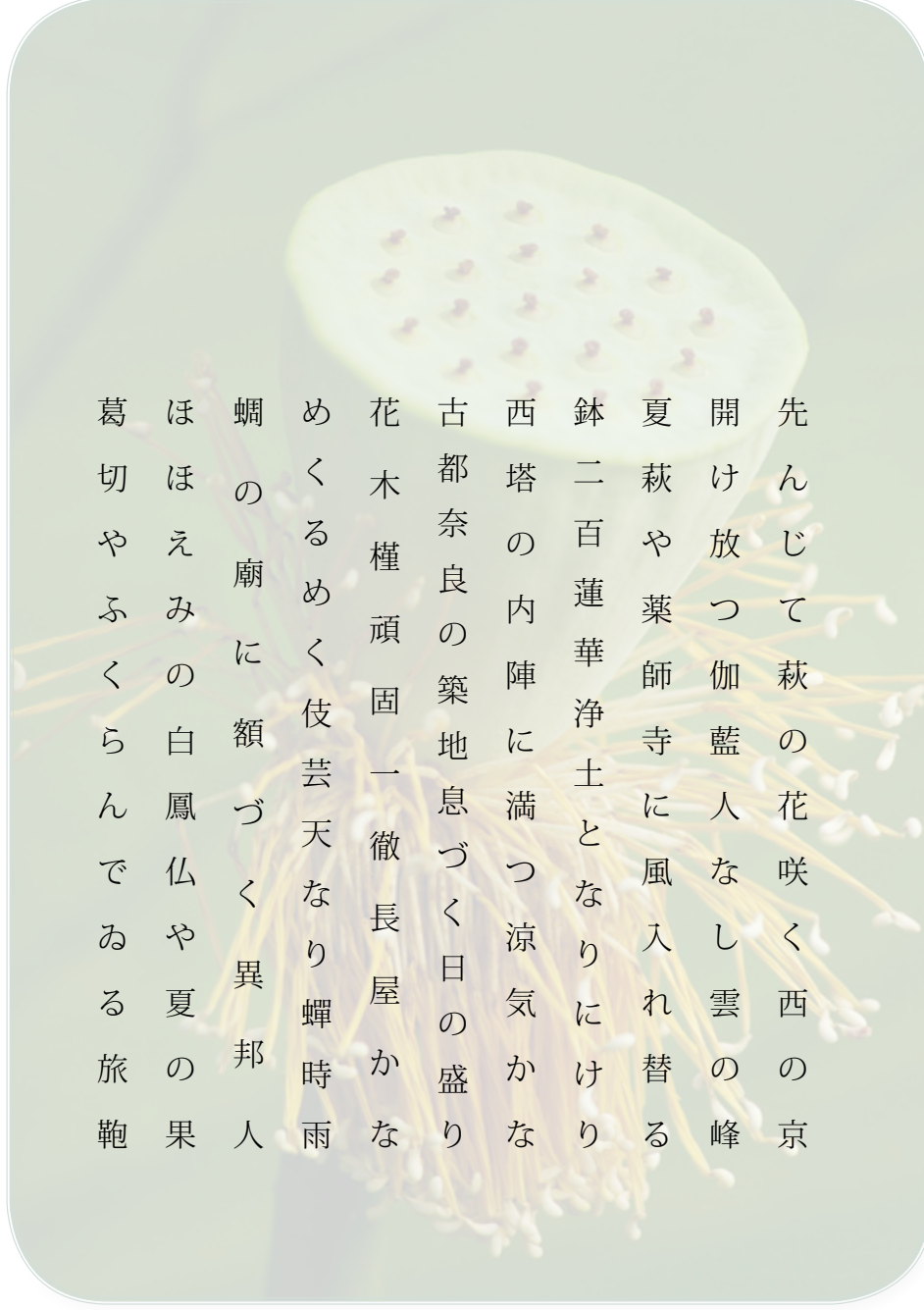


◇特別作品◇

## 蓮華浄土

落合 絹代

奈良 格子の奥に灯す白扇子  
『大和古寺の仏』 緋く夜の秋  
奈良なれや茶粥いたたく朝ぐもり  
朝涼の鐘の音にかす耳二つ  
涼風や塔の見ゆれば塔を指し  
炎天の南大門に人少な  
仁王像炎帝発止と睨みすゑ  
なかんづく涼風通ふ二月堂  
奈良坂の片陰仰ぐ東大寺



先んじて萩の花咲く西の京  
開け放つ伽藍人なし雲の峰  
夏萩や薬師寺に風入れ替る  
鉢二百蓮華浄土となりけり  
西塔の内陣に満つ涼気かな  
古都奈良の築地息づく日の盛り  
花木槿頑固一徹長屋かな  
めくるめく伎芸天なり蟬時雨  
蝸の廟に額づく異邦人  
ほほえみの白鳳仏や夏の果  
葛切やふくらんでゐる旅靴

# 風土集



## 神蔵器選

ポンヌフの出て来る映画巴里祭 川崎 内藤 静

深煎りの珈琲の香の晩夏かな  
雨脚の海より上がる大夕立

四点杖茅の輪くぐりの前をゆく  
七月の白馬を飾る轡かな

炎天や電柱の世はまだ続く 川崎 豎山 道助  
峰雲や留まるもまた志

夢見なくなれば晩年水中花  
西日射す血判状は壺の中

油照回れ右して父戻る 南丹 南奉 栄蓮  
かけ声に車輪嵌め込み銚の立つ

新調の胴懸輝き銚の立つ  
羽織裏に遊ぶ竜柄屏風祭

奥琵琶の隠れ家昼の鮎づくし  
腹帯巻く虫くひ仏風涼し

干草の日を経て別の匂ひかな 川崎 中根 美保

曳き棒を灼くる地に置き人力車  
さみどりの盤欠けてをり時計草

朝涼や木槌が叩く鉦の峰  
琵琶持たぬ石の弁天灼けてをり

炎天の中行く報道写真展 東京 中嶋 陽子  
高原の夏星空の映画館

夕顔や小さき文香文に添ふ  
うつぶせのサッカーゴール晩夏かな

バディ組むつなぐ手離し泳ぎ出す 奥田 茶々  
炎天や口に炎を吐く大道芸 東京

緑蔭の三太刀七太刀古戦場  
サングラス稚に泣かれてしまひけり

北斎館の夕ぐれ近し燕の子

滝行の草鞋を結ぶ女かな  
走り梅雨一人で祝ふ誕生日  
横浜 館 泰生

向日葵やバス停毎に競ひをり  
屋敷神祀る旧家や花ざくろ  
贅沢に伊豆の海見る薄暑かな  
伊豆下田お吉の悲話や半夏生  
日盛りのピカソ展出て目を拭ふ  
川崎 水井千鶴子

白南風や太陽の塔直立す  
変身の子供の遊ぶサングラス  
遠雷やふとももの思ふ石仏  
白百合や天使は持たぬ土踏まず  
百日紅「沿線九条の会」へ行く  
横浜 池田加代子

梅雨明や兜太書のピラ高く上ぐ  
さくら木の茂みに在す観世音  
大暑かな火を少なめに炒め物  
返信の残りしままに晩夏かな  
鰯刺の一直線に飛び込めり  
さいなま 須藤美智子

市立つや朝顔どれも大輪に  
眉引きの左右揃はぬ炎暑かな  
汗しとど松切る人の真顔かな  
己が影踏み踏み歩く日の盛り  
ぎつしりと小ぶりの文字や半夏生  
福生 雨宮 桂子

涼しさや千三百畳の祈り  
ささやきのやうに涼風とあるく  
竹煮草富士の裾野に富士を見ず  
グラジオラスちよつと寄り道しようかな  
師の秘葉熊の胆てふ夏負けて  
横手 森屋慶基

熊の胆削る包丁風の死す  
熊の胆の苦さ極めり暑さ負け  
妻が来て今日の話や門涼み  
温泉に母を連れ行く溽暑かな  
八十路なれど余生にあらざ更衣  
川崎 遠藤道遙子

夕立や満席の駅喫茶店  
白南風や離島航路の操舵室  
九十六嬢句集上梓や柿の花  
黒川の田水走りて蛸舞ふ  
手に響く髪切虫を持ち歩く  
津山 生田恵美子

病む家の物少し干す青田風  
台風の沖を遥かに燕の子  
子燕の闇より口を開けて待つ  
花石榴人体模型暗がりに  
結び解き白き炎となる朴の花  
藤枝 間島あきら

文晁sの烏の落款大暑来る  
トーマスの眉の三角夏旺ん